

旧約聖書の「アル＝ハッシェミーニート」
（「八弦の立琴に合わせて」「第八調」）
—文法的な再検討と聖書外の音楽資料からの考察—

竹内茂夫

I. はじめに

詩篇の「表題」に現れる種々の「音楽用語」が何を表しているかは、それぞれについて様々な邦訳および議論がある。本稿では、2つの詩篇の他に歴代誌にも現れる「アル＝ハッシェミーニート」に注目して論じたい。

「アル＝ハッシェミーニート」עַל־הַשְּׁמִינִית は、詩篇6篇および12篇それぞれの1節すなわち「表題」に現れる。直訳では「その第8の上で」と訳すことができ、七十人訳も *ὑπὲρ τῆς ὀγδόης* と序数詞で訳している。これは、1歴代誌15章21節にも現れ、בְּכַנּוּרוֹת עַל הַשְּׁמִינִית (直訳「リラ [複数形] で、その第8 [女性単数形] の上で」) のようなフレーズになっており、כְּנֹר «リラ」と関わりがあるように読める。詩篇では、12篇ではそのようにはなっておらずעַל־הַשְּׁמִינִיתが単独で現れるが、6篇ではבְּגִיטוֹת עַל הַשְּׁמִינִית (直訳「(弦の) 音楽で、その第8 [女性単数形] の上で」) として現れる。

* 本稿は、「旧約聖書に見られるテアミーム」(古代西アジア文献研究会第12回討論会、2013年3月30日) および「旧約聖書の『アル・ハッシェミーニート』と『アル・アラーム』について」(日本福音主義神学会西部部会春季研究会議、2014年4月21日) にて発表したものに大幅に加筆と修正を行なったものである。コメントを下さった方々および本稿の査読をして下さった方々に感謝いたします。

詩編に表れる「アル=ハッシュェミーニート」は、「八弦の立琴に合わせて」(新改訳)、「第八調」(新共同訳、岩波書店訳)のように訳されている。この2つだけでも意味するものは大きく異なるが、その他にも様々な見解が出されている。

本稿では、עַל־הַשְּׁמִינִית に関する先行研究を整理し、旧約聖書の文脈を再検討するとともに、時代が近く影響があったかもしれない他の地域の音楽資料から考察してみたい。

II. 先行研究

「アル=ハッシュェミーニート」については、HALOT¹の שְׁמִינִית の項目によくまとめられていると思われるので、それに基づいてみていきたい。HALOTでは、まず「直訳では第8(に応じて)の上で。しかし名詞を伴わず、意味は不明」(私訳。以下特記以外同様)と記した上で5点にまとめているが、そのうち演奏そのものに関わる3点を挙げる。HALOTの説明を邦訳しカギ括弧に入れた上で、それぞれの項目に対して同じまたは類似の見解を唱えている注解書などを挙げておく。

1) 「8弦の楽器で。KBL(疑問符付き)、そしてKrausの『詩篇』27頁もそうである」。新改訳もそうであるが、その他にAnderson²、Klein³、Kraus⁴、Braun⁵、Clines⁶もそのようである。一方、Briggs and Briggsは「単なる思いつきで、旧約

¹ HALOT = L. Koehler. and W. Baumgartner, *The Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament* (Leiden: Brill, 2001), p.1562.

² A.A. Anderson, *The Book of Psalms: Psalms 1-72* (The New Century Bible Commentary, 1. London: Oliphants, 1972), p.49.

³ Ernest Klein, *A Comprehensive Etymological Dictionary of the Hebrew Language for Readers of English* (New York: Macmillan Publishing Company, 1987), p.666.

⁴ Hans-Joachim Kraus, *Psalms 1-59: A Commentary* (Minneapolis: Augsburg Publishing House, 1988), p.31.

⁵ Joachim Braun, *Music in Ancient Israel/Palestine: Archaeological, Written, and Comparative Sources* (Grand Rapids, Michigan / Cambridge: W.B. Eerdmans, 2002), p.41.

⁶ David J.A. Clines (ed.), *The Dictionary of Classical Hebrew, Volume VIII: Sin-Taw* (Sheffield: Sheffield Academic Press, 2011), p.442.

聖書では支持がない⁷とし、Delitzschは「少なくとも楽器の名前ではないことは明らか⁸とする。

2) 「楽器の第8弦。1歴代誌15:21『ベヒンノーロート』のから推定。Eerdmans *The Hebrew Book of Psalms* (OTSt 4 (1947) 60) がそうである」。他に、Kraus⁹、Gesenius¹⁰でも触れられている。

3) 「1歴代誌15章20節の『アル=アラーモート』と比べると、低いオクターヴを意味するかもしれない。Gesenius-Buhl『中辞典』およびKönig『辞典』511aがそうである」。その他に、Keil¹¹、Delitzsch¹²、BDB¹³、Briggs and Briggs¹⁴、Dahood¹⁵、Braun¹⁶、Craigie and Tate¹⁷、Clines¹⁸、Gesenius¹⁹にも言及されている。一方、Anderson²⁰は「ありそうにない」とし、Montagu²¹は「オクターヴで

⁷ Charles Augustus Briggs and Emilie Grace Briggs, *A Critical and Exegetical commentary on the Book of Psalms, Vol. 1* (The International Critical Commentary. Edinburgh: T. & T. Clark, 1906-07), p.lxxvii.

⁸ F. Delitzsch, *Psalms* (Commentary on the Old Testament, 5. Grand Rapids, Michigan: William B. Eerdmans, [1871]), I:131.

⁹ Kraus, *Psalms 1-59*, p.31.

¹⁰ Wilhelm Gesenius, *Hebräisches und Aramäisches Handwörterbuch über das Alte Testament. 18. Aufl. Gesamtaufgabe.* (Springer-Verlag, 2013), p.1379.

¹¹ C.F. Keil, *The Book of the Chronicles* (Biblical Commentary on the Old Testament, III. Grand Rapids, Michigan: William B. Eerdmans, [n.d.]), p.203.

¹² Delitzsch, *Psalms*, I:131.

¹³ BDB = Francis Brown, Samuel Rolles Driver and Charles Augustus Briggs, *A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament* (Oxford: Clarendon Press, 1906), p.1033.

¹⁴ Briggs and Briggs, *A Critical and Exegetical Commentary on the Book of Psalms*, I:lxxvii.

¹⁵ Mitchell J. Dahood, *Psalms 1, 1-50* (Anchor Bible, Vol 16. Garden City, NY: Doubleday & Co., 1965), p.38.

¹⁶ Braun, *Music in Ancient Israel/Palestine*, p.41.

¹⁷ Peter C. Craigie and Marvin E. Tate, *Psalms 1-50. Second Edition* (Word Biblical Commentary, 19. Nelson Reference & Electronic, 2004), p.90.

¹⁸ Clines, *The Dictionary of Classical Hebrew*, VIII: 442.

¹⁹ Gesenius, *Hebräisches und Aramäisches Handwörterbuch über das Alte Testament*, p.1379. この辞書は、HALOTが言及する18版以前のGesenius-Buhlとは異なる。

²⁰ Anderson, *The Book of Psalms: Psalms 1-72*, p.49.

²¹ Jeremy Montagu, *Musical Instruments of the Bible* (Lanham, Md., & London: Scarecrow

歌ったかどうか、女性が男性と並んで歌ったかどうか、不明である。より深刻なこととして、イスラエル人が我々同様7音階を持ち、そこで今日我々が第8音をオクターヴと呼ぶユニゾンに準じる考えを持っていたかどうかについて不明である」と述べている²²。

HALOT 以外では、「8つの様々な旋律」(Delitzsch²³)、「8つの教会旋法」(Delitzsch²⁴)、「第8番の調」(新共同訳、岩波書店訳、BDB²⁵、Gesenius²⁶)、「第8音」(小林²⁷)、「第8の音または旋法」(Braun²⁸)という見解が見られる。

III. 考察

ここでは「アル=ハッシュェミーニート」についての上記の HALOT 他でなされている見解について、まず旧約聖書のマソラ本文を再検討し、次いで時代が近く交流があったかもしれない他の地域の音楽資料から考察してみたい。

1. 詩篇と歴代誌の文脈

「アル=ハッシュェミーニート」が現れる2つの詩篇および歴代誌の文脈を見てみると、詩篇6篇の内容に関して、「病気を神の罰と受け止め、神の憐れみによ

Press, 2002), p.62.

²² HALOTではその他に「4) もしかすると秋の新年祭において8番目の結びの儀式として一部が演奏された」および「5) グンケル=ベググリヒ『詩編序説』[...]の憶測で、ヨシュア 11:1, 19:15 のカナン都市 *שמרון* という名前から生まれを示す *השמרונית* を提案」しているが、「これらの解決策の提案のうち最後の5)のみはありそうもないか不可能でさえあるとして落とすべきであり、この憶測は考慮から外すべきである」とされている。

²³ Delitzsch, *Psalms*, I:37.

²⁴ Delitzsch, *Psalms*, I:37.

²⁵ BDB, p.1033 (ただし“but wholly dubious”と付け加えている), Clines, *The Dictionary of Classical Hebrew*, VIII: 442.

²⁶ Gesenius, *Hebräisches und Aramäisches Handwörterbuch über das Alte Testament*, p.1379.

²⁷ 小林和夫「詩篇」『ヨブ記→イザヤ書』(新聖書注解:旧約3。いのちのことば社、1975年) 138頁

²⁸ Braun, *Music in Ancient Israel/Palestine*, p.39.

る回復を祈る人の嘆き」(岩波書店訳)、詩篇12篇は「世俗的な手段で敵の攻撃を逃れよとの勧めを退けて、ヤハウエにのみ寄りすがる決意をした人の、ヤハウエの(神殿における)正しい裁きと敵への報復を祈る歌」(岩波書店訳)のよう

に言われている。そのため、「あたかも *השמינית* は低音を示し、*על השמינית* は『低音のオクターヴ上で』と同等である。詩篇46篇は喜ばしい歌で *על עלמות* という指示で伴奏されている一方で、詩篇6篇は物悲しげで、詩篇12篇も同程度に陰鬱で悲しいという事実は、これに合う。」²⁹という見解が見られる。

しかしながら、歴代誌15章を見てみると、ペリシテ人との戦いに勝利して神の箱が戻って来たことを、リラ、シンバル、ラッパなどの様々な楽器と歌で歓喜する箇所で、少なくとも詩篇6、12篇の悲痛な内容とは異なり、「物悲しいゆえに低音が合う」と矛盾するように思われる。

オクターヴについては古代ギリシア音楽の項にて述べるが、この項目にも現れた *על עלמות* についていくらか触れておきたい。

2. 「アル=アラーモート」

上述の「アル=ハッシュェミーニート」に関する HALOT の項目においても、「アル=アラーモート *על עלמות*」というフレーズが言及されている。「アル=ハッシュェミーニート」が1歴代誌15章21節において *על השמינית* (直訳「リラ [複数形] で、その第8 [女性単数形] の上で」)として現れるのに先行して、20節では「アル=アラーモート」というフレーズが *על עלמות* (「アラーモートの上で、ネーベル [複数形] で」)として現れる。歴代誌の他には詩篇46篇の「表題」に現れるのみである。

על עלמות は直訳では「少女 [複数形] の上で」と訳することができるが(と違って定冠詞はない)、訳では *ὕπὲρ τῶν κρυφίων* 「その秘密(複数)の上で」(Bauer³⁰、Muraoka³¹ 参照)と訳されている。邦訳を見ると、岩

²⁹ Delitzsch, *Psalms*, I:131.

³⁰ W. Bauer, *A Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature*, 3rd ed. (Chicago: University of Chicago Press, 2000), p.572.

³¹ T. Muraoka, *A Greek-English Lexicon of the Septuagint* (Louvain, Paris, Walpole, MA:

波書店訳では「琴を少女調で奏で」と訳されているが、新改訳は「十弦の琴を用いてアラモテに合わせた」、新共同訳は「琴をアラモト調で奏で」のように音訳に留めている。

למרת について、HALOT においては上述の שמיני の項目でも触れられていたが、当該の項目 עלמה (p.836) では次のように記されている³²。「詩篇 46¹ 1 歴代誌 15²⁰、意味は不明：若い少女のスタイル、ソプラノで（歌うこと）(Gesenius-B.)³³； Ullendorff *Eth. Bib.* 91: 高いピッチの楽器³⁴、 Delekat ZAW 76 (1964):292f. HALOT 以外の見解としては「旋律の名前、若い女性の曲に合せて」(Clines³⁵、Craigie and Tate³⁶)、「弦楽器の特別な調律」(Braun³⁷)、「エジプトからよく知られている種類の特定の弦楽器のために訓練された女性を指し示す (Sachs, 1940)」(Braun³⁸) などが見られる。最後の点については、神殿礼拝に女性が参加したかどうかは疑わしいとされているが (Anderson³⁹)、議論がある⁴⁰。

Peeters, 2009), p.415.

³² 読み替えを伴う提案については HALOT の該当項目を見られたい。

³³ 他に Keil, *The Book of the Chronicles*, p.203, Delitzsch, *Psalms*, I:93, Briggs and Briggs, *A Critical and Exegetical Commentary on the Book of Psalms*, I:lxvii, lxxvii, "the falsetto voice," Montagu, *Musical Instruments of the Bible*, p.62 を参照。

³⁴ 同様の見解は、Braun, *Music in Ancient Israel/Palestine*, p.39, Craigie and Tate, *Psalms 1-50*, p.342, David J.A. Clines (ed.), *The Dictionary of Classical Hebrew, Volume VI: Samekh-Pe* (Sheffield Academic Press, 2007), p.428 を参照。ただし、デリッチは「アラモトと呼ばれる楽器については[...]推挙すべきものは一切ない」と述べている (Delitzsch, *Psalms*, I:93)。

³⁵ Clines, *Dictionary of Classical Hebrew*, VI:428.

³⁶ Craigie and Tate, *Psalms 1-50*, p.342.

³⁷ Braun, *Music in Ancient Israel/Palestine*, p.39.

³⁸ Braun, *Music in Ancient Israel/Palestine*, p.39.

³⁹ Anderson, *The Book of Psalms: Psalms 1-72*, p.50.

⁴⁰ 本稿では扱わないけれども、女性の世俗の歌うたい שרות がただだけでなく (2サムエル 19:36、伝道者 2:8、2歴代誌 35:25)、捕囚からの帰還者のリストにおいて「神の宮に仕える者」の中に「男女の歌うたい」として女性の歌うたい משררות の人数が記されているので (エズラ 2:65、ネヘミヤ 7:67)、彼女達の職務についても考えなければならないだろう (小板橋又久『古代オリエントの音楽

על למרת については別に詳細に扱わなければならないが、歴代誌においては כנבלים に後続していることから、ネーベルというおそらく弦の数がキンノールよりも多い弦楽器において、高音弦(複数)を使った奏法の指示ではないかという提案にとどめたい。

3. 「八弦の立琴」

古代イスラエルにおけるリラの証拠は、少なくとも 30 点見られるとのことである⁴¹。それらに描かれている弦の数は大半が 6 弦以下である。アッシリア王セナケリブがラキシユを攻略した時 (前 701 年) に彫られたレリーフには、歩きながらリラを弾く南ユダ王国の捕囚民が 3 名描かれており、弦の数は 5 弦とされている⁴²。一方で、メギッド出土の前 13/12 世紀の象牙のエッチングには女性が弾く 9 弦のリラ (大型、非対称、四角い共鳴箱) が描かれており⁴³、前 7 世紀の書体とされる「王女マアダナに (属する)」と記された印章には 12 弦のリラが彫られている⁴⁴。これらからすると、旧約聖書の時代に 8 弦以上のリラが存在した可能性が高い。

とはいえ、「8 弦」かどうかは検討しなければいけないだろう。後 1 世紀になるが、フラヴィウス・ヨセフスが著した『ユダヤ古代誌』によると、「キニユラには 10 弦ありプレクトラム [ばち] をも用いて弾かれ、ナブラには 12 弦あり指で弾かれる」(7.306) とある⁴⁵。「キニユラ」は、おそらくヘブル語でキンノール כנור すなわちリラのこと、ナブラはおそらくヘブル語でネーベル נבל

ウガリトの音楽文化に関する一考察』(リトン、1998 年) 39-41 頁)。

⁴¹ Braun, *Music in Ancient Israel/Palestine*, p.18 および p.xxxii-xxxvi の Table 2 に画像の一覧がある。なお、これはリラであってハーブではない。

⁴² British Museum WA. 124947. 画像は http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Lachish_Relief_British_Museum_13.jpg にて見ることができる。

⁴³ <http://israelambition.files.wordpress.com/2012/09/meggido-lyre1.jpg>.

⁴⁴ http://members.bib-arch.org/bswb_graphics/BSBA/08/01/BSBA080103400L.jpg. ただしその解釈と正統性に関する疑問については Braun, *Music in Ancient Israel/Palestine*, pp161-164 を参照。

⁴⁵ Montagu, *Musical Instruments of the Bible*, pp41-42.